

日本昔話における対立の構造

—隣モチーフを中心に—

川 森 博 司

はじめに

- 一 「海神の贈物」における登場人物の対立
 - 二 二元的対立の昔話
 - 三 日本国内での地域差—奄美・沖縄地域の問題
 - 四 韓国との比較
- まとめ

はじめに

はじめに
日本の村落社会において口伝えて語られてきた昔話は実に多様であり、各地域における熱心な採集活動の結果、相当な数の昔話が集められている。これらの膨大な昔話群を分類し、全体を眺められるようにしたものとして、関敬吾による『日本昔話大成』全一二巻（一九七八〜八〇）、そして稲田浩二、小澤俊夫責任編集による『日本昔話通観』全二九巻（一九七七〜九〇）がある。この『大成』や『通観』は、日

本の昔話の全容を知るためにかなり便利なものであるが、そこにみられる分類は、全体の見通しをつけて日本の昔話を論じていくためには、まだまだ不十分なものである。

関敬吾は「厳密な意味における昔話（笑話・動物譚をのぞく）は、昔話を一個の全体としてみるときは、婚姻を主題とした昔話と、富の獲得を内容とした昔話の二つの群に大別される」（関一九八一、二六五頁）と述べている。

婚姻を主題とする昔話⁽¹⁾は、『大成』では、「第二部 本格昔話」の最初の部分に、「一、婚姻・異類筆」、「二、婚姻・異類女房」、「三、婚姻・難題筆」の三つに分けてまとめられており、『通観』では、「一、むかし語り」の中に「IX 婚姻」としてまとめられている。しかし、富の獲得を内容とする昔話は、『大成』でも『通観』でも、さまざまな項目の中に散在しており、その全体を見通すことがむずかしい。

日本の昔話の全体としての特質を明らかにしていくためには、この富の獲得を内容とする昔話の系列の総体を筋道立てて理解していく視

点を確立することが、今後ぜひとも必要である。そのためのひとつの試みとして、本稿では、富の獲得を内容とする昔話が、筋の展開の上でどのような共通の形式（枠組み）をもつか、また、そこにどのような登場人物相互の関係があらわれるかを考察してみることにしたい。そうすることによって、この系列の昔話を整理・理解するための糸口をつかみたいと思う。

一 「海神の贈物」における登場人物の対立

富の獲得を内容とする昔話の中に、関敬吾が『昔話の歴史』において、「海神の贈物」という標題のもとにまとめている一連の昔話がある。その基本的な内容の展開は、次のようにまとめられる（関一九八二、七七—一〇六頁）。

I 主人公が何らかの契機によって海神から、呪宝（小僧・動物）を与えられる。その呪宝（小僧・動物）は、一定の条件を守るときには、無限に富を生産し、主人公は裕福になる。

II a 主人公が、慢心して条件を守らなくなり、富を失う。

b 主人公の女房が、欲を出して条件を守らず、富を失う。

c 隣の爺（婆）が、呪宝（小僧・動物）を借りて富を得ようとするが、失敗する。

d 兄（弟）が、呪宝（小僧・動物）を借りて富を得ようとするが、失敗する。

海神の贈物が呪宝の場合は「竜宮小槌」、小僧の場合は「竜宮小僧」、動物の場合は「竜宮小犬」というように、さらに下位分類される。

関によれば、この一連の昔話は「すべてを欲するものはすべてを失う」という基本的な理念をあらわそうとしたものであり（関一九八二、八七頁）、この理念を核に「海神の贈物」の昔話のさまざまなヴァリエーションが展開している。例をあげてみよう。

「事例1」 爺が薪を切り、町で売って生活していた。ある日薪が売れないので、竜神を念じつつ薪を橋の下に沈めた。すると、水の中から美しい女が小さい一人の子どもを抱いてあらわれてきた。「竜神が薪をくれたことを喜び、その礼にこの子どもをやるというっているからつれて帰れ。鼻たれ小僧様といって願えば何でも聞いてくれる。そのかわりに毎日三度ずつ海老贈なますを供えよ」と言って女は去った。爺は小僧をつれて帰り、神棚の脇にすえて、毎日海老の贈を供えて大切に育てた。欲しいものを頼めば、鼻たれ小僧様が鼻をかむ音をさせて何でも出してくれた。爺はりっぱな家や倉をつくって大金持ちになった。今や爺の仕事は贈にする海老を買うだけであったが、それも面倒くさくなって、小僧を神棚からおろして、「もうお願いするものはないから竜宮へお帰りください」と言うと、小僧は外に出、鼻をすする音が聞こえた。すると、いままでのりっぱな家屋敷はなくなって、以前のあばら家だけがあとに残った。爺は驚いて外に飛び出したが、もうどこにも鼻たれ小僧様の姿はなかつた。⁽³⁾

【事例2】 爺が山で柴刈りをしていて、淵の水が渦巻くのがおもしろ

いので、次々に柴を投げ込むうちに、三か月ほど刈りためた柴を全部投げ込んでしまった。すると、淵の中から美しい女が出てきて、柴の礼を言い、爺を背負って淵の底へつれて行った。淵の底にはりっぱな屋敷があり、爺が投げ入れた柴はその脇に積み重ねてあった。その屋敷には老人がいて、酒肴を出してもてなし、帰りに醜い童をくれた。家に帰ると童は「俺はワントクというものだ。座敷の奥の誰も気づかぬところにおけ。そうすればよい運を授けてやる」と言った。爺がそのようにしておくと、その童がよく働いて、爺の財布はいっぱいになり、穀物入れは蓋が合わなくなった。爺は喜び、毎日山から帰ると、ひそかに奥へ行ってワントクの頭をなで、にこっと笑って出てくる。婆がこれを怪しんで、爺の留守の間に奥へ行ってみると、見るからくない童がいたので、いやらしくてたまらず、箒でたたいて追い出してしまった。それからまただんだんと元どおりのただの爺と婆になったことである。

—岩手県北上市(旧江刺郡)—

【事例3】 昔ある所にたいへん正直な男がいた。年の暮れに正月用の薪(セチクンゼ)を売りに行ったが、いくら売り返しても売れないので、担いでもどるとき、海辺へ来て、「竜宮様にあげます」と言っ

て、海へ薪を全部投げ込んだ。すると、竜宮様があらわれて、「セチクンゼをありがとう、ほうびとしてこの槌をやるので、おまえの欲しいものを打ち出せ」と言って、打ち出の小槌をくれた。そこで

家へもどって、「米倉欲しや」といって小槌をふつてみると、米と倉、そしていろいろと欲しいものが出てきて、男はにわか大金持ちになった。それを隣の悪い心の男が聞いて、槌を貸してくれとい

うので貸してやると、その隣の男は喜んで、「コメクラ欲しや」といって槌をふつた。すると小盲(小さい盲人)が何人も出てきて、「ボンボン(歩くたびにボンボンと鳴る児童用のくりぬきの下駄)買うてや、ボンボン買うてや」と言って、おさまりがつかなくなった。

—高知県高岡郡—

【事例4】 親が死んで、兄には財産を残したが、弟にはくれない。弟が、年末に兄の家へ薪と門松を届けて餅の米や味噌をもらおうとするが、兄嫁の惜しんでいる声が聞こえるのでそのままそを出て、川に薪と門松を投げて家に帰った。元日の朝「迎えをやるから竜宮の乙姫の所へ来てくれ」という手紙が縁に置いてあった。海岸へ行くときと亀がいて、弟を背中に乗せて海にできた道を行き、竜宮世界に着いた。門番に手紙のことを告げると、「門松と薪を寄付してくれた人か」と言い、「乙姫に望みのものを聞かれたら赤犬を望みなさい」と教えてくれる。乙姫に接待され、「一日一升以上食べさせないように」と注意されて赤犬をもらって帰った。弟が米一升調達して家で犬に食わせると、黄金を一升ひる。犬は日に日に黄金をひるので評判になり、兄嫁にすすめられて兄が一月犬を借りにきた。やむなく食べ物に注意をして貸すと、兄嫁が欲張って二升食わせたので、犬は腹をこわして、ただの糞をひり、死んでしまった。兄が

死体を庭に埋めると犬の腹の上から牡丹が生えた。弟が死体と牡丹を引き取って庭に埋めると牡丹から黄金が落ちた。兄が牡丹を譲ってもらおうと、うじがわいて落ち、欲な者はどこまでもたたられた。⁽⁶⁾

— 鹿児島県薩摩郡下飯村⁽⁷⁾—

事例1を「慢心型」、事例2を「夫婦対立型」、事例3を「隣人対立型」、事例4を「兄弟対立型」とよぶことにしよう。

関の考えにしたがえば、上の四つの事例は、それぞれ、同一人物の心境の変化、夫婦の対立、隣人との対立、兄弟の対立によって、「すべてを欲するものはすべてを失う」という同一の理念をあらわそうとしている。関は次のように述べている。

昔話はしばしば説かれる如く、自由奔放な変化をするが、しかし何らか一つの理念を核として展開している。それは特殊な事件や信仰を説くのではなく、人類にもっとも普遍的な理念のようである。そうしてこれがまた宗教・言語・政治を越えて地球の広い地域に広がっていく誘因ともなり、そうしてそれぞれ民族によって、また時代の文化的条件によって変えられ、土着していくのではなからうか(関一九八二、九七頁)。

「海神の贈物」における「すべてを欲するものはすべてを失う」という理念は、ここでいう「人類に普遍的な理念」と考えられる。実際、世界中多くの地域で、この理念をあらわす昔話が語られている(関一九八二、九五—九六頁)。個々の「海神の贈物」の昔話によって表現される理念が、関のいうように「人類に普遍的」というような広がり

をもつものだとしたら、この理念から、日本の昔話の特質を読みとることはできない。だが、この普遍的な理念をあらわすためにどのような要素を用いているかによって、日本の特質を考えてみる事ができるだろう。

昔話は登場人物の行為を軸に物語が展開され、登場人物はしばしば対立関係に置かれる。「海神の贈物」では、人物の対立関係があらわれない「慢心型」のほかに、「夫婦対立」、「隣人対立」、「兄弟対立」の三つの対立がみられた。「海神の贈物」に相当する『日本昔話大成』の「竜宮童子」、「沼神の手紙」、「黄金の斧」の三つの項目に収録されている類話全七七話のうち、「慢心型」が二話、「夫婦対立型」が二話、「隣人対立型」が八話、「兄弟対立型」が七話である。

最初にあげた内容の展開の枠組みによれば、Iの部分とIIの部分との間で対立関係が設定されている。人物の対立関係がない事例1を除いて、事例2、3、4に共通する枠組みをさらに単純化すれば、次のようにまとめることができる。

I Ⅷ主人公の富の獲得✓主人公が、何らかのきっかけで富を得る。
II Ⅷ別の人物の失敗✓別の人物が、主人公をまねて富を得ようとして、失敗する。

ただし、事例2の「夫婦対立型」の場合は、夫婦は生計を共にしているため、女房の欲心により主人公も同時に富を失うことになる。ところが、事例3や4においては、主人公が富を得たのと対照的に、隣人や兄が富の獲得に失敗する過程が描かれている。つまり、対立関係

二 二元的対立の昔話

の設定の仕方によって、筋の展開にずれが生じている。事例1、2において「すべてを失う」のは主人公であるのに対して、事例3、4において「すべてを失う」のは、隣人や兄など、主人公とは別の人物なのである。

このような類型間の違いはあるものの、上で示したIⅧ主人公の富の獲得▽、IIⅧ別の人物の失敗▽という基本的な展開は、「海神の贈物」の類話全体を見通すために基礎とすべき枠組みであると考えられる。

では次に、このI、IIと同じ展開の枠組みをもつ昔話にどのようなものがあるか、そして「別の人物」にはどのような人物が登場するか、検討してみることにしよう。

一一 二元的対立の昔話

『大成』と『通観』の中から、IⅧ主人公の富の獲得▽、IIⅧ別の人物の失敗▽という二元的対立の展開の枠組みをもつ主な話型をぬき出すと、表1のようになる。

『大成』では、「隣の爺」の項目を中心に「運命と致富」、「大歳の客」、「異郷」のそれぞれの項目に分けられており、『通観』では、また違った視点から、「超自然と人」、「異郷訪問」、「天恵」、「厄難克服」、「動物の援助」のそれぞれの項目に分けられている。

『大成』の「異郷」の項目に含まれる三つの話型は、先に『昔話の

表1

『大成』	『通観』
五 運命と致富 163B 取付く引付く	II 超自然と人 14A 大みそかの客一授福型 14B 大みそかの客一猿長者型
八 隣の爺 184 地蔵浄土 185 鼠浄土 187 雁取爺 188 鳥吞爺 189 竹取爺 190 花咲爺 191 舌切り雀 192 腰折れ雀 194 瘤取爺 195 猿地蔵 196B 見るなの座敷	42A 笠地蔵一来访型 42B 笠地蔵一招待型 47 こぶ取り爺 52 金の斧 III 異郷訪問 75 竜宮童子 76 竜宮犬 81 地蔵浄土 82 鼠の浄土 85 舌切り雀 86 鶯の浄土（見るなの座敷）
九 大歳の客 197 猿長者 199A 大歳の客 203 笠地蔵 204A 大歳の亀	IV 天恵 90 竹切り爺 91 鳥飲み爺 103 猿地蔵 104 とり付くひっ付く
十一 異郷 223 竜宮童子 225 沼神の手紙 226 黄金の斧	XI 厄難克服 302A 水の神の文使い一書き替え型 302B 水の神の文使い一授福型 XII 動物の援助 364A 犬むかし一花咲か爺型 364B 犬むかし一雁取り爺型 365 腰折れ雀 395 もの言う亀

歴史』で関敬吾が「海神の贈物」という標題のもとにまとめたものである。『大成』の「隣の爺」という項目は、その「海神の贈物」の分析の中で示された「隣人対立型」にまさに対応するものであるが、「大歳の客」の項目にまとめられた話型や「取付く引付く」の中にも「隣人対立型」になるものが数多くある。つまり、「隣の爺」という項目の設定は、この項目以外にも「隣人対立型」の昔話がかんりあるという意味で、分類の一貫性の観点からは適切なものとはいえない。

たとえば、「隣人対立型」であっても、大晦日に客をむかえるというモチーフをもっていれば、『大成』では「大歳の客」という項目に分類されてしまうことになる。したがって、『大成』の「隣の爺」の項目には、関敬吾がとりあえず「隣人対立型」の中で代表的だと考えたものが、まとめられているにすぎないとみていいだろう。

それに対して『通観』では、「隣の爺」という項目を立てておらず、『大成』で「隣の爺」の項目の中にあつた話型が、四つの項目に分けて収録されている。

稲田浩二は「タイプ様式上の日本的様式は、いわゆる隣の爺型に最も顕著な、登場者を二極に分けて人間存在を包括的にとらえようとするものである」と述べている(稲田一九八八a、一六七頁)。つまり、「隣の爺型」は日本の昔話の中に非常に幅広くあらわれる様式上の特徴と考えられるので、「大歳の客」、「異郷訪問」というような、話の中で重要なモチーフを任意に示した項目と一列に並べることは不適当なのである。

それに対して『通観』では、様式上の特徴である「隣の爺」という項目を設定せず、主人公の行為をとりまくさまざまな状況にもとづいて「超自然と人」、「異郷訪問」、「天恵」、「厄難克服」、「動物の援助」といった項目を立てている。この分類は、非常に幅広い範囲にわたる「隣の爺型」の類型を整理していく上で参考になる。ただし、インデックスからいわゆる「隣の爺型」を探し出そうとするときの手がかりは失われてしまっている。

たとえば『通観』では、「海神の贈物」に対応する「竜宮童子」、「竜宮犬」とともに、「地藏浄土」、「鼠浄土」、「舌切り雀」、「鶯の浄土」(見るなの座敷)が、「異郷訪問」の項目にまとめられている。そこで、先の「海神の贈物」の分析と関連させていくために、まずこの「異郷訪問」の項目の昔話を続けて分析したいと思う。

稲田浩二は、この「異郷訪問」という項目(タイプ群)を、次のように記述している。

「昔話の主人公が」異質の秩序の支配する「異郷」へ、みずから意志でおもむくことはほとんどありえない。彼は異郷の住人の案内・援助によるか、または無邪気に迷いこむのである。異郷と人界との間には大きな断絶があり、人間は普通異郷に近寄りがたいものである。異郷に招かれた主人公は、その世界で歓待され、超自然的な力を呪宝などの形で人界に持ち帰り、奇跡の果報を受ける(稲田一九八八a、一五〇頁)。

この「異郷訪問」の項目のうち、「地藏浄土」と「鼠浄土」は、筋の展開からみて基本的に同じ類型に属す。例をあげてみよう。

「事例5」 爺が団子を神棚にあげると、ころがり落ちて山へ行くので、「団子どの、団子どの、どこまで行くぞ」と言うと、「山家まやみ山の堂まで、堂まで」と言い、堂へ入った。地藏様に聞くと、「食った」と言い、「鬼が大勢来てばくちを打つかうしろに隠れ、鶏のまねの銭を取れ」と教えてくれる。爺は言われたとおりにし、鬼がばく

ちを打ちはじめると、両袖を打って、「カケロー」と言う。鬼は「かける虫来た、逃げろ」と言ってお金を放って逃げたので、爺はそれを持ち帰った。隣の意地悪婆がそれを見て、爺にまねをさせ、むりに団子をころがして団子にものを言わせ、また地蔵様にも食べさせ、地蔵様のうしろに隠れた。鬼がばくちを打ちはじめたので、爺が「カケロー」と言うと鬼は逃げ、爺は笑った。それを聞いた小鬼が、「かける虫でない、人間だ」と言ったので、鬼がもどってきて爺を折檻した。爺が血だらけで帰ってくると、婆は、爺が赤い着物をみやげにもらってきたと思った。人まねはいけない。(10) (地蔵浄土)

—青森県三戸郡—

〔事例6〕 よい爺が山へ木こりに行き、昼飯の団子を食べようとしたら団子がころがりだした。爺が追って行くと、鼠の穴へころげこんだ。穴の中では鼠が「猫さえごさらじゃ鼠の世盛り、ベッタラベッタ」と餅をついていた。爺が「ニャア」と猫の鳴きまねをすると鼠が皆逃げたので、爺はあとに残った餅をもち帰った。翌日、隣の悪い爺がまねをして鼠の穴へ行ってみると、案のじょう、同じように鼠が餅をついていた。爺が「ニャオ」と言うと、鼠が「昨日の爺がまた来た。今日はやつつけよう」と大勢寄ってきて、爺を噛み殺した。(11) (鼠浄土)

—島根県飯石郡—

このように「地蔵浄土」と「鼠浄土」は、地下の世界における富の獲得の手順が若干異なるだけで、筋の展開は基本的に同一である。その基本的な枠組みは、次のようになる。

I① 爺が食べ物を穴の中に落とし、自分もそれを追いかけて穴の中にはいる。

② 爺は穴の中で、地蔵・鼠のおかげで、富を得る。

II 隣の爺がまねて失敗する。

これをより抽象化すれば、先に提出したIへ主人公の富の獲得√、IIへ別の人物の失敗√という図式に対応する。ただ、IIの段階が「海神の贈物」においては、四つの類型がそれぞれある程度の比率であらわれたのに対し、「地蔵浄土」や「鼠浄土」においては、多くの場合、「隣人対立型」となっている。ただし、主に九州・四国地方の「地蔵浄土」において、継子と実子の対立が導入されている事例がかなりある。『大成』に収録されている「地蔵浄土」と「鼠浄土」の類話を統計的にみると、全三〇七話のうち、二一〇話(六八・四%)が「隣人対立型」、一一話(六・八%)が「継子・実子対立型」、五一話(一六・六%)が「対立関係なし」となっている。「海神の贈物」と比べると、「夫婦対立型」や「兄弟対立型」がほとんどあらわれず、「隣人対立型」にかなり集中してきているのが特徴である。

では次に、「舌切り雀」の例をみることにしよう。

〔事例7〕 爺と婆が一羽の雀を飼って、大切に育てていた。ある日、山へ行った爺が、「おおさぶや、こさぶや、山のむーこになりたや、さぶさぶ」と言いながら帰ってくると雀がいな。尋ねると、のりを食べたから舌を切ったと婆に言われたので、かわいそうに思った爺は杖をついて、「雀のお宿はどこじゃいな」と捜しに行

った。山で会ったひとりの人に尋ねると、「牛の小便三杯飲んで行く」と雀のお宿に行ける」と言われ、そのとおりにした。また歩いて行くひとりの人に会った。尋ねると、「馬の小便七杯飲んで行けばよい」と言われ、そのとおりにして行くと、ギーコバツタリコ、ポーンヨナクナ、オツテミシヨ、カチカチと機を織る音が聞こえ、雀のお宿に着いた。雀はよく来てくれたと喜び、爺はごちそうや雀の踊りでもてなされた。一晩泊まった爺はみやげにつづらをもらい、途中であけてはならないという言いつけどおりに帰ってあけてみると、大判小判がざくざくと出た。欲深婆はそれを聞いて雀のお宿へ出かけるが、途中でつづらをあけて蛇、蛙、三つ目の化け物がいっぱい出て腰を抜かした。⁽¹²⁾

—香川県三豊郡—

この展開をまとめると次のようになる。

- I ① 飼っていた雀がのりを食べたので、婆が舌を切って逃がす。
 ② 爺が捜しに行き、試練を経て雀のお宿にたどりつく。
 ③ 爺は雀に歓待されて、つづらをもって帰る。つづらには大判小判がはいっている。

II 婆も雀のお宿へ出かけてつづらをもらってくるが、途中であけて蛇、蛙などが出てくる。

これも、I 八主人公の富の獲得、II 八別の人物の失敗、という展開に対応しているが、I と II の人物の対立関係が事例 7 では「夫婦対立型」となっている。『大成』に収録されている類話全七九話のうち、

「隣人対立型」が二二話（一五・二％）、「夫婦対立型」が五六話（七〇・九％）、「対立関係なし」が一話（一三・九％）で、「夫婦対立型」の比率が高い。しかし、「舌切り雀」の場合、婆が飼っていた雀の舌を切るという発端から始まる筋の性格上、婆が対立人物になることが自然であるにもかかわらず、「隣人対立型」が一五・二％もあらわれているということは、日本の村落社会の中で昔話を語り伝えてきた人々の「隣人対立型」に対する好みを示しているとみることができ（小澤一九八四、二四〇頁参照）。

『大成』では、この「舌切り雀」に続いて「腰折雀」があげられているが、「腰折雀」には異郷訪問のモチーフが欠けている。したがって、登場するのが爺と婆と雀であることに着目すれば、二つは同じグループとみなされるが、異郷訪問のモチーフに着目して分類すると、別のグループに属することになる。『通観』では「異郷訪問」という基準でひとつのグループをまとめているので、「腰折雀」は別の「動物の援助」の項目に入れられている。

「舌切り雀」と「腰折雀」の関係については、『大成』の「舌切り雀」の項の注において、関敬吾が次のようにコメントしている。

この舌切り雀と腰折雀は同一系統に属するものと一般にみられるが、前者は親切な爺が雀の里に行つて、親切な行為の返礼として宝物をもたらしてきたものである。この形式は国際的形式では「泉のそばの紡ぎ女」で知られるように、親切「な者」もしくは虐待される末子が異郷を訪問し褒賞を与えられる形式で、わが栗

拾い型（AT四八〇）その他がこれに属する。異郷訪問が一つの重要な要件である。常世国、竜宮郷の古説話から現在の伝承にも多い。ところが次の腰折雀には親切な主人公の爺の里の訪問は欠けている。朝鮮・中国の伝承にも異郷訪問は欠けている。この限りにおいては腰折雀の分類は動物報恩譚（AT五五四）である。

腰折雀はおそらく大陸から移入されたものであるが、舌切り雀はこれを基礎としてわが国で形成されたかどうか研究すべき問題であろう。（関一九七八、二四八—二四九頁）

では、この「腰折雀」の例をみておこう。

〔事例8〕むかし、あるとき雨戸に何かぶつかった音がしたので、婆が雨戸を開けてみると、けがをした雀がいた。婆が薬をつけ、かごに入れて介抱し、けががなおってから放してやった。するとある日、その雀が雨戸のところに、何か種のようなものをこぼして行った。

婆は、次の日、畑にそれをまいておくとひょうたんが生え、ひょうたんをもいで来て軒下につるしておく、次の日、その下に米粒がこぼれていた。婆がひょうたんの中を見ると、米がいっぱいはいっており、爺と婆でいくら食べてもなくならなかった。あるとき隣のマン気ばんばが来て、その話を聞くとさっそく家に帰って、雀を無理につかまえて、けがをさせて逃がした。次の朝、窓の下を見ると種らしいものがこぼれていた。マン気ばんばは喜んで畑にまくと、やはりひょうたんが生え、さっそくひょうたんをかかえて来て、軒下につるしておいた。マン気ばんばが、待ちきれなくてひょうたん

の中をのぞくと虫けらばかりいっぱいはいっていた。だから、あま
り欲ばるものではない。⁽¹³⁾

—山形県東田川郡—

先のコメントにあったように爺の異郷訪問のモチーフがなく、「舌切り雀」の場合に比べて単純な展開になっている。また、「夫婦対立型」ではなく「隣人对立型」になっている。『大成』の類話では、全一四話のうち、「隣人对立型」が一話（七八・六％）で、「対立関係なし」が三話（二一・四％）、「夫婦対立型」は一話も収録されていない。

このように人物の対立関係からみても、「舌切り雀」と「腰折雀」の違いは際立っている。

さて、われわれが求めている二元的対立の枠組みをもつ昔話はまだまだ残っているが、これまでの事例で大体の傾向が明らかになってきた。つまり、日本におけるこの類型の昔話では、相当の比率で「隣人对立型」が優勢なのである。『大成』に収録されている類話を手がかりに、それぞれの話型においてⅠ、Ⅱの対立を設定している話の数と、その中で「隣人对立型」の占める割合を示すと表2のようになる。

小澤俊夫は「昔話にみられる隣モチーフ—日本」（一九八四）と題する論文において、『通観』に収録された資料をもとに分析し、「日本の昔話において、主人公が幸せを獲得したとき、それに対立する人物、ないし対照をなす人物として、隣人を登場させることがきわめて多い」（小澤一九八四、二四六頁）ことを明らかにしている。そして、次の

表2

	隣人対立型の話数(比率)	対立型の総話数
取付く引付く	52 (89.7%)	58
地蔵浄土	96 (78.7%)	122
鼠浄土	114 (89.8%)	127
雁取爺	19 (48.7%)	39
鳥呑爺	51 (96.2%)	53
竹取爺	76 (92.7%)	82
花咲爺	52 (88.1%)	59
舌切り雀	12 (17.6%)	68
腰折雀	11 (100%)	11
瘤取爺	32 (91.4%)	35
猿地蔵	55 (94.8%)	58
見るなの座敷	3 (100%)	3
猿長者	7 (38.9%)	18
大歳の客	19 (86.4%)	22
笠地蔵	5 (50.0%)	10
大歳の亀	13 (81.3%)	16
竜宮童子	4 (13.3%)	30
沼神の手紙	0 (0%)	10
黄金の斧	4 (44.4%)	9

ように結論づけている。

隣モチーフの、多くの話型への浸透、国内での分布の広さと濃さを考えると、これらの昔話を伝えてきた日本人にとって、隣への関心がいかに強く、重要であったかを知ることができる。それは、日本人が社会で生きていくうえで隣に関心をはらうことが必要で、重要であったからであろう。それは、これらの昔話においてそうであるように、人の社会的行動を律する、ひとつの強い規範だったとさえいえるだろう。(小澤一九八四、二四九―二五〇頁)

地域という点で最も重要な学問的課題になるのではないかと指摘している(稲田一九八四、一二一―一二三頁)。そして、具体的には次のような点に言及している。

本土では、いわゆる「隣の爺型」の昔話が成熟し普及しているが、琉球では、本土で「隣の爺型」になっている話群がほとんど「隣の爺型」になっていない。たとえば、奄美諸島や沖縄には「地蔵浄土」は全くないようである。「鼠の浄土」や「舌切り雀」も伝承的・土着的でないようなものがごくわずか認められるだけである。「竹切り爺」や「鳥呑爺」も、奄美諸島にも沖縄にも全く

小澤の見解は大筋において納得できるものといえるだろう。ただし、ひとつには日本国内での差異の問題が十分に処理されておらず、また国外との比較による仮説の実証もおこなわれていない。

そこで、われわれは次に、この日本国内での差異の問題と、国外との比較の問題を扱っていくことにしよう。

三 日本国内での地域差―奄美・沖縄 地域の問題

日本国内における昔話の地域性については、稲田浩二が、奄美・沖縄という琉球圏と本土圏という二つの伝承圏を対置して巨視的に考察することが、日本の昔話の地

ない。「猿地藏」も、奄美で二例、沖縄で二例しかない。「雁取爺」は一例もないが、「花咲爺」に準ずる話は、金を産む猫の話として認められる。また、これらの話は全部、爺と婆の登場する話ではなくて、兄弟の話になっている。(稲田一九八八b、七九頁)

稲田は特に、われわれが前の章で検討した「隣の爺型」の昔話を基準に、本土の伝承と奄美・沖縄地域の伝承との違いを示している。つまり、稲田は、われわれが分析対象としている富の獲得をめぐる昔話について、本土伝承圏と琉球伝承圏でその存在の仕方が異なっているということを指摘しているのである。

われわれは、これまでの章では、伝承地域による地域性を考慮に入らず、日本国内に存在する類話ということとひとくくりにして、考察をおこなってきた。そこで、この章では、稲田の指摘を受けて、鹿児島と沖縄県の伝承に注意をはらいながら、日本国内での地域差の問題を検討してみることしたい。

『通観』第二五巻鹿児島編の解説の中に「優勢な兄弟譚形式」という項目があり、次のように述べられている。

本州・四国と鹿児島を除く九州各県でむかし語りにおいて優位な隣の爺型が当県では弱く、これに代わって兄弟(姉妹)の型ないし、兄弟を主要登場者とする兄弟譚が優勢となる。最も端的にこれを示すのは、他地方では原則的に隣の爺型となるサブタイプないし話型でしばしば兄と弟が登場することである。⁽¹⁴⁾

その例としてあげているサブタイプないし話型は、「大歳の客一致

富型」、「竜宮のみやげ一金ひり鳥」、「竜宮のみやげ一金ひり犬一金の木型」、「竜宮のみやげ一竜宮犬一狩獵型」、「竜宮のみやげ一竜宮犬一天の米蔵型」、「もの言う亀一米の木型」、「もの言う亀一兄弟の賭け型」、「大歳の鬼」、「銭ひり猪」、「とび付こうとび付こう」である。

このうち「もの言う亀」は、『大成』では「大歳の亀」とよばれている話型である。例をあげてみよう。

「事例9」 爺が年の暮れに山へ薪を取りに行き、「今年のとーしのくれのきーたきた。とーしゃーどーしてとーるとろ」と言うとき、「お米でとらしゃい」と言う者がある。見ると亀なので、持ち帰って婆に見せると、「佐賀の町で見世物にせよ」と言う。翌朝早く爺が「もの言うぐうずば(亀を)見んさい」とふれ歩き、亀とやりとりをしてみせると、見物人がお金や着物をたくさんくれる。隣の婆が知って爺を責めると、爺はその亀を借りて町へ出かけ、聞いたとおりに亀に話しかけるが亀は何も言わない。見物人が怒って爺をたたき、爺は血だらけになって帰る。隣の婆は爺がりっぱな着物をもらったと思いき、汚ない着物や古い道具を燃やす。隣の爺が亀を焼いたので、爺は灰をもらって帰る。殿様が通りかかり、その目に灰がかかったのがめられるが、爺は枯れ木に花を咲かせてみせ、殿様からほうびをもらう。隣の婆が聞いて爺にまねをさせるが、花は咲かずに殿様と家来の目・口・鼻にかかったので、たたかれて逃げてきた。⁽¹⁵⁾

—佐賀県小城郡—

「事例10」村一番の分限者の兄と、老母を養う貧乏な弟とがいた。大みそかになるが、弟は力飯の米もないので、兄に借りに行く。大「貸す米はない」と追い返される。母が節約して残した少しの米で力飯を炊き、弟は漁に出かける。獲物もなく浜を歩いていると小亀が「霜月師走の亀が、クン屋行って、アン屋行って、大屋へのみやげ、みやげ」とものを言っているの、つれ帰って飼う。正月になり、うわさを聞いた村人が来て金を置いて見物していくので、正月をすることが出来る。兄が少しの金を出して亀を持ち帰り、料金を取って見物させるが、亀がものを言わないので亀を殺す。弟が亀を葬ると竹が生え、天に届くほど伸び、切る節ごとに米や金が出て弟は分限者になる。兄が竹を盗むと汚物しか出ず、兄は落ちぶれ、弟はますます栄えた。⁽¹⁶⁾

—鹿兒島県大島郡徳之島町—

この「大歳の亀」(もの言う亀)の話の展開の枠組みは、次のようである。

- I ① 年の暮れに貧しい爺(弟)が、ものを言う亀をみつける。
- ② つれ帰った亀が人々の前でものを言って、爺(弟)はお金をもつける。

II 隣の爺(兄)が亀を借りて、人々の前でものを言わせようとするが、亀はものを言わず、失敗する。

この話型も、われわれが設定したI八主人公の富の獲得、II八別の人物の失敗、という枠組みに当てはまるものである。そして、事例

9では「別の人物」が「隣の爺」になり、事例10では「兄」になっている。

松浪久子(一九八四)は、この「大歳の亀」の話型に属する全国六五話の事例を用いて分析をおこなっている。彼女は話の展開の細部を綿密に検討しているが、登場人物の關係に着目すれば、「隣人対立型」、「兄弟対立型」、「それ以外の対立型」、「成功型(対立關係なし)」の四つに分けられる。松浪の資料によれば、「隣人対立型」二七話、「兄弟対立型」二四話、「それ以外の対立型」四話、「成功型(対立關係なし)」一〇話である。ただし、この四類型は、日本全国にまんべんなく分布しているのではない。日本全体の「兄弟対立型」二四話中一九話が、奄美大島以南に集中しているのである(鹿兒島県でも屋久島の事例は「隣人対立型」になっている)。そして、奄美大島以南には「隣人対立型」はあらわれておらず、二五話中一九話が「兄弟対立型」である(表3参照)。したがって、少なくとも「大歳の亀」という話型に限っていえば、奄美大島以南では、本土で優勢であった「隣人対立型」が好まれません、「兄弟対立型」に対する好みが大変強いことを指摘できる。

ただし、本土においても、新潟県では四話のすべてが「兄弟対立型」であり、愛媛県の一話も「兄弟対立型」である。松浪の六五話の資料を眺めるだけでは、なぜ新潟

表3 「大歳の亀」の事例の分布
(本土の欄には屋久島の事例も含んでいる)

	隣人対立型	兄弟対立型
本土	27	5
奄美・沖縄	0	19
計	27	24

県に四話集中して「兄弟対立型」があらわれているのか理解できない。ただ、『大成』の「沼神の手紙」の項目に「兄弟対立型」の事例が三話あり、そのうち二話が岩手県、一話が新潟県の事例であるので、北日本には「兄弟対立型」が成立する何らかの基盤があるのかもしれない。

二章で『大成』の「竜宮童子」、「沼神の手紙」、「黄金の斧」の三つの項目に収録されている全七七話のうち七話が「兄弟対立型」であることを示したが、その内訳は、沖縄県一話、鹿児島県三話、そして右に示したように新潟県一話、岩手県二話である。鹿児島県のは、二話が甌島で、一話が喜界島で採集されたものである。

次に、『通観』の「鹿兒島編」と「沖縄編」において、「海神の贈物」に対応する項目として設定されている「竜宮のみやげ」の事例を検討してみよう。

「鹿兒島編」では、「竜宮のみやげ」の項目に収録されている全一六話のうち八話に对立関係が設定されている。その八話のうち、「兄弟対立型」が六話、「隣人対立型」が一話、「夫婦対立型」が一話である。やはり「兄弟対立型」が優勢である。伝承地をみると、「兄弟対立型」の六話は、長島、甌島、奄美大島、喜界島であり、「隣人対立型」一話は種子島、「夫婦対立型」一話は沖永良部島である。つまり八話とも島嶼部で採集されたものであるが、ここでは「兄弟対立型」が優勢である。

「沖縄編」の「竜宮のみやげ」の項目は全一九話のうち、一六話は

はつきりした对立関係を設定しておらず、残りの三話は「西の家と東の家」という対立が二話、友人との对立関係が一話である。「沖縄編」では、「竜宮のみやげ」の項目には「兄弟対立型」があらわれていない。

二元的対立の枠組みをもつ昔話の中で、奄美・沖縄地域で類話が多いのが、「大蔵の客」とよばれるタイプの昔話である。中でも、「猿長者」とよばれる話型は、奄美・沖縄地域での伝承密度が濃い。『日本昔話事典』の「猿長者」の項には、『日本昔話集成』には一五例の報告があり、それ以後の採集で八〇例ほどの採集報告があるが、全体のうちで、八二例までは奄美諸島と沖縄県からの報告であり、六例は東北地方と新潟県からの報告であり、南北の両端に主として伝承されている話といえる。特にモチーフの完備した伝承は南島にのみ限られている（三原一九七七、三九一頁）と記述されている。例をあげてみよう。

「事例11」 貧乏な爺と婆が年の夜に食べ物がなく、隣の金持ちに「米を貸してくれ」と頼むがことわられる。白いひげをはやした乞食のような爺が金持ちの家に来て、「泊めてくれ」と頼んでことわられ、貧乏な爺婆の家に泊めてもらう。爺婆が「食べ物が無い」と言うとき、白ひげの爺は二、三粒の米を鍋に入れて煮させ、鍋いっぱいのご飯にする。朝になり白ひげの爺が二人に望みを聞くと、二人は「若くなりたい」と答える。爺が川から汲んできた水を沸かして浴びさせると、二人は若返る。二人が金持ちの家に正月のあいさつに行くと、

表4 「大歳の客」の事例の分布

	隣人対立型	兄弟対立型
鹿児島県陸地部	5	0
鹿児島県島嶼部	10	2
沖 縄 県	25	0

金持ちは二人からわけを聞き、白ひげの爺に詫びて、「お願いしたい」と言う。爺があらわれて金持ちの家に入り、「あなたたちは欲が強いから助けても得にならない」と言い、門の石を焼いて坐らせて主人を猿にし、使用人や家族をみなもぐらや鼠にした。この金持ちは染め物屋だったので猿の爪は黒い。また若水を浴びたり飲んだりする習慣もこれからはじまった。⁽¹⁷⁾

— 沖縄県国頭郡大宜味村 —

この「猿長者」を含む「大歳の客」の類話について『通観』の資料を検討してみよう(表4参照)。「鹿児島編」では、「大歳の客」の項目に、全一七話が収められており、対立関係を設定しているのは二三話である。そのうち「隣人対立型」が一五話、「兄弟対立型」は二話となっている。伝承地は「隣人対立型」一五話のうち、一〇話が島嶼部、五話が陸地部である。また、「兄弟対立型」二話は徳之島と飴島で伝えられている。つまり、この話型では、島嶼部においても「隣人対立型」が優勢である。

「沖縄編」では、「大みそかの客」という項目に全六七話が収められ、五一話が対立関係を設定している。そのうち「隣人対立型」が二五話で、「兄弟対立型」は一話もない。

このように「大歳の客」の分析の結果は、「大歳の亀」の分析から

得た「奄美・沖縄では『隣人対立型』が好まれず、『兄弟対立型』に対する好みが強い」という推論に反するものである。したがって、鹿児島県島嶼部、沖縄県の地域の昔話に本土のものとは異なる特徴があることは確かだとしても、単純に「隣人譚が少なく兄弟譚が多い」というような結論を出すことはできない。日本国内の地域差については、奄美・沖縄地域の伝承をさらに多くの話型にわたって、きめ細かに分析していく必要がある。

四 韓国との比較

韓国の昔話の類型を整理したものに、崔仁鶴の「韓国昔話のタイプインデックス」(一九七六)がある。われわれが考察の対象としているⅠ八主人公の富の獲得√、Ⅱ八別の人物の失敗√という二元的対立の枠組みをもつ昔話は、その中の「14 葛藤」の「B 兄弟間」と「C 隣人」に収められている。「兄弟間」は「兄弟対立型」を示し、「隣人」は「隣人対立型」を示すものであるが、そこに収録されている話型名と類話数は表5の通りである。この中に日本の話型と類似した展開を示すものがある。その対応関係を示すと表6のようになる。

「兄弟対立型」の「ホンプとノルプ」、「兄弟と犬」、「金の砧 銀の砧」が、それぞれ「腰折雀」、「雁取爺」と「花咲爺」、「地藏浄土」と「鼠浄土」という日本において「隣人対立型」が優勢な話型に対応していることが注目される。また「真似する石亀」に対応する「大歳の亀」

四 韓国との比較

表 5

14 葛藤	
B 兄弟間	C 隣人
457 ホンブとノルブ (14話)	475 金の斧銀の斧 (3話)
458 兄弟と犬 (5話)	476 瘤取り爺 (11話)
459 真似する石亀 (9話)	477 甘い糞 (3話)
460 金の砧・銀の砧 (15話)	478 若返る泉 (1話)
461 三番目の息子と僧の贈物 (8話)	479 鬼神の話盗み聴く (2話)
462 欲ばり兄と塩売り弟 (3話)	480 不思議な木の葉 (1話)
463 青い玉赤い玉 (2話)	481 ふくれた頬 (1話)
464 善良な弟と虎の援助 (2話)	
466 貧乏弟と山賊 (1話)	

表 6

	韓 国	日 本
兄弟対立型	ホンブとノルブ	腰折雀
	兄弟と犬	雁取爺 花咲爺
	真似する石亀	大歳の亀
	金の砧 銀の砧	地藏浄土 鼠浄土
隣人対立型	金の斧 銀の斧	黄金の斧
	瘤取り爺	瘤取爺
	甘い糞	鳥吞爺 竹取爺
	若返る泉	猿長者

も日本本土では「隣人対立型」が優勢なものであった。このうち「ホンブとノルブ」は、韓国において、早くから小説化され、小学校の教科書にも掲載されている有名なものである。例をあけてみよう。

【事例12】 ノルブとホンブという二人の兄弟が住んでいた。兄のノルブは金持ちだが欲が深くて意地悪な男、一方、弟のホンブは貧乏だが心のやさしい男で働き者であった。ある日、ホンブの家の燕の巣が蛇におそわれて、ひな燕が脚をくじいた。ホンブは急いで薬を塗って手当てをしてやった。翌年の春、その燕がやってきて、ひょうたんの種を一つ落としていった。ホンブがその種を拾い上げ、庭先にまいておくと、五個のひょうたんが実った。ホンブがそれを割ってみると、中から、米、お金、美しい仙女、赤い瓶、青い瓶が出てきた。そして赤い瓶からは大勢の木工、青い瓶からは材木が出てきて、りっぱな建物がたち、ホンブは有名な金持ちになった。兄のノルブはその噂を聞いてやってきて、ホンブからいきさつを聞き出した。そして家に帰ってひな燕の脚をわざと折り、傷口に薬をつけ糸でくくって手当てをした。翌年の春、その燕がノルブのところに来て、種を一つ落とした。ノルブが種をまいておくと、ひょうたんが実った。それで一つを割ってみるとトケビ(小鬼)が出てきて、ノルブを情容赦なくたいた。次のひょうたんを割ると、借金取りが数多くあらわれ、ノルブは無一文になってしまった。三つ目のひょうたんを割ると、中から汚れた水が出てノルブの家を水びた

しにしてしまった。ノルブがたまらず弟に助けを求めると、弟は兄を親切に迎え、二人は財産を半分に分けて仲良く暮らした。⁽¹⁸⁾

―慶尚北道金泉市―

日本の「腰折雀」の展開と類似しているが、兄と弟の対立関係になっているのが大きな特徴である。では次に、「兄弟と犬」の例をあげてみよう。

〔事例13〕むかし、ある村に二人の兄弟が住んでいた。母親が突然病気になる、死んでしまった。弟は大変悲しんだが、兄は悲しみの表情さえ浮かべなかった。ある日、弟が墓参りに行くと、一匹の犬がいたのでつれ帰って育てた。あるとき、弟が畑で麦をまいていると、犬がついてきて手伝った。ちょうどそのとき、一人の旅人が来て、犬が麦まきを手伝うかどうかについて賭けをした。旅人は荷物を全部賭け、弟は畑と牛を賭けた。犬が麦まきを手伝って畑を耕したので、旅人は売りに行くはずの錦をすべて取られてしまった。弟はしだいに金持ちになった。兄はうらやましくたまらず、弟に犬を借りて、畑で麦まきをしていると、錦をいっぱい背負った旅人が来た。兄は弟と同じように旅人と賭けをしたが、犬は少しも手伝わず、畑と牛を取られてしまった。兄は腹を立てて犬を殺した。弟が死んだ犬を墓に埋めると、そこから竹が生えて天まで届き、宝物が竹を通してこぼれ落ちて、弟は一層金持ちになった。兄はうらやましく死んだ犬を掘り出して自分の庭に埋め、その墓に竹を植えると、竹は成長して天まで届き、小石と土がこぼれ落ちた。その勢いで兄の

家はこわれてしまった。⁽¹⁹⁾

―慶尚北道金泉市―

雁取爺、花咲爺と類似した展開であるが、やはり対立関係が兄と弟になっている点に大きな特徴がある。

次の「真似する石亀」は、日本の「もの言う亀」で「兄弟対立型」となっていた事例10とほとんど共通した展開である。

「金の砵 銀の砵」は、日本の「地藏浄土」や「鼠浄土」と類似する展開で、「兄弟対立型」となっている。ただし、変化型として「隣人対立型」の事例も紹介されている(崔一九七六、三三〇―三三二頁)。

以上の比較から、韓国の富の獲得をめぐる昔話の類型においては、日本の場合より「兄弟の対立」を採用する傾向が強いということは指摘できる。ただ、日本と同様に「隣人対立型」となるものもかなりあるので、その詳しい比率・傾向を知りたいところである。

「韓国昔話のタイプインデックス」には、話型ごとにその基本的な内容の展開の枠組みと類話の収録資料名が示されているだけで、類話の内容の梗概は載せられていない。したがって、類話の内容を分析していくためには、その原資料にもとって分析していく必要がある。また、この「インデックス」に示されている類話の数は、韓国の類型の特徴を把握していくためには、十分ではない。韓国では、この崔仁鶴のインデックス以後、総数一五、一〇七話の資料を収録した『韓国口碑文学大系』全八二巻(一九八〇―八八、韓国精神文化研究院)が刊行された。比較のためにはこの資料を分析しなければならないが、地域

ごとにまとめられた方言そのままの資料であるので、外国人研究者には処理がむずかしく、韓国の研究者による分析・研究の進展が待たれるところである。⁽²⁰⁾

先ほどの日本国内での地域差の問題とあわせて、韓国をはじめとする隣接地域との比較研究は、日本の昔話の特質を的確に位置づけていくために、ぜひとも必要とされる今後の大きな研究課題である。

まとめ

これまでの考察から、次のようなことが明らかになった。

(1) 日本の富の獲得を内容とする昔話においては、Ⅰ主人公の富の獲得▽、Ⅱ別の人物の失敗▽という展開の枠組みをもつものが重要な位置をしめている。

(2) この枠組みにおいては、ⅠとⅡの間で主人公と別の人物の二元的対立の関係が設定される。主に『日本昔話大成』に収録されている事例をもとに、この枠組みをもつ日本の昔話を分析すると、対立の関係として「夫婦対立型」、「兄弟対立型」、「隣人対立型」、「継子・実子対立型」などがあらわれる。そしてその中で、「隣人対立型」に対する好みはかなり強い。

まとめ
(3) 「大歳の亀」や「竜宮のみやげ」などの話型においては、奄美・沖縄地域で「兄弟対立型」がかなり高い比率であらわれる。そのことにより、日本本土と奄美・沖縄地域との間で「隣人対立型」に対

する好みの地域差が考えられる。しかし、「大歳の客」の類話においては、奄美・沖縄地域でも「隣人対立型」がかなりの比率で優勢であるので、奄美・沖縄地域の伝承の正確な位置づけのためには、さらに多くの話型にわたる考察が必要とされる。

(4) 先のⅠ、Ⅱの展開の枠組みをもつ昔話について、日本と韓国の類話を比較すると、韓国では日本の場合よりも「兄弟対立型」が好まれていることが確認できる。しかし、韓国には「隣人対立型」の昔話も数多くあり、詳しい日韓比較のためには、韓国の資料のさらなる分類・整理が必要である。また、外国の資料との比較のためには、当該国の研究者との協力態勢を確立し、成果を交換していく必要がある。

さて、日本では一般的に「隣人対立型」が好まれること、韓国では「兄弟対立型」に対する好みが日本に比べてかなり強くあらわれること、奄美・沖縄地域において「兄弟対立型」が本土より数多くあらわれていること、などは何を意味しているのであろうか。

小澤（一九八四）は、日本の昔話に「隣人対立型」が多いことから、日本人の隣人への関心の強さを指摘した。昔話に表現されたものが、昔話を語った人々の生活している実際の社会とどのように関連するか、ということとは大きな問題であるが、昔話が少なくとも伝承者の意識のあり方を何らかの形で反映していることは確かであろう。

日本人の近隣関係に対する関心は、たとえば憑きもの現象などにもみられる。吉田禎吾は、鳥根県のキツネ憑きや高知県の生霊憑きの調

査をもとに「憑く、憑かれるという現象は、親戚関係のない、近隣の間で生まれやすい」(吉田一九七〇、五一頁)ことを指摘している。

このような近隣関係に対する関心の強さは、日本本土においては社会人類学的な意味での厳密な父系血縁のシステムが存在していないことと関連づけられるのかもしれない。たとえば、養子制度をみると、日本本土では父の姓とも母の姓とも異なる者を「むこ養子」にすることができ、すなわち、「家」の継承のためには、血縁原理を譲歩させるわけである。それに対して、中国や韓国では、父系血縁の原理が厳密で、養子は「異姓不養」といって、必ず同一父系血縁者からとらねばならない。男の子どもがいないときの養子は、理想的には弟の長男ということになる。日本本土と沖繩を比較すると、沖繩には門中というものがあって、本土に比べてはるかに父系の認識が強い。しかし、沖繩では、養子は理想的には弟の長男を、それがかなわなくても、同じ門中からということが一般に強調されるものの、実際の運用や地域によって例外がかなりある。つまり、中国や韓国のような厳密な父系血縁のシステムは存在しない⁽²²⁾。

中根千枝は、日本本土、沖繩、中国、韓国・朝鮮の社会組織を比較した論文の中で、「中国や朝鮮では父系血縁が、日本本土では「家」の継承を基盤とする本・分家関係による組織が優先されたのに対し、沖繩では、いずれを優先させることなく、両者にそれぞれに発展しうる二つの要素のバランスをとり、弾力ある対処をしながら今日までできたものと思われる」と述べている(中根一九七三、二一九五頁)。

このような各地域における父系血縁に対する執着度の差異が、それぞれの地域の「隣人对立型」と「兄弟対立型」に対する好みの違いと一定の対応関係を示すことも考えられるが、これまでみてきたような昔話伝承の多様性から考えて、直接・単純に社会組織と昔話を結びつけることはつしむべきであろう。ただ、昔話が必要、背景となる社会に支えられたものである以上、実際の社会との相互関係には、今後ぜひ目を向けていかねばならないと思う。

昔話は、それを語った人々が自分たちの社会のイメージを想像力を用いて描き出したものである。したがって、富の獲得をめぐる昔話における登場人物の相互関係のあり方は、日本の村落社会で暮らした人々の人間関係に対する意識を内側から探っていく上で貴重な資料となる。今後、そのような村落社会の内側からの意識の考察を十分に進めていくためには、本稿でも指摘したように、「話型」の分類を再検討して、日本の伝承の総体を見通すことができ、かつ国外との比較の基礎となりうるような「インデックス」を練り上げていく必要がある。そのような段階を経ることによって、昔話の分析は、日本文化を論じていくためのひとつの鍵となりうると筆者は考える。

註

(1) 以下、『日本昔話大成』を『大成』、『日本昔話通観』を『通観』と略記する。

(2) 婚姻を主題とする昔話については、特に異類婚姻譚を中心に論じたところがある(川森一九八九a、一九八九b参照)。

- (3) 『旅と伝説』第二卷第七号(通卷一九九号、一九二九)、二〇―二二頁。以下事例は筆者の判断により要約し、叙述をわかりやすくした場合がある。
 - (4) 佐々木喜善一九七四(一九二二)、一九三一―一九四頁。
 - (5) 『旅と伝説』第一六卷第一号(通卷一八一号、一九四三)、二二頁。
 - (6) 『通観』第二五卷(一九八〇)、一五八頁。
 - (7) 鹿児島県、沖縄県の伝承は、特にその中での伝承地域が問題であるため、市町村名まで示す。
 - (8) 本稿において、「対立」という言葉は、Ⅰ、Ⅱという枠組みに位置づけられる登場人物の関係を示すものとして用いる。
 - (9) 引用における「」内は、筆者が補ったものである(以下においても同様)。
 - (10) 『通観』第二卷(一九八二)、一六七―一六八頁。
 - (11) 『通観』第一八卷(一九七八)、二二―二三頁。
 - (12) 『通観』第二二卷(一九七八)、一九八頁。
 - (13) 『通観』第六卷(一九八六)、三三七―三三八頁。
 - (14) 『通観』第二五卷、九〇六頁。
 - (15) 『通観』第三三卷(一九八〇)、一〇三頁。
 - (16) 『通観』第二五卷、四二八頁。
 - (17) 『通観』第二六卷(一九八三)、五四頁。
 - (18) 崔編著一九七四、一九三一―一九七頁。
 - (19) 崔編著一九七四、一八二―一八四頁。
 - (20) 『韓国口碑文学大系』では、独自の類型分類を試みている。韓国の口承説話の分類体系については、稿を改めて論じることにした。
 - (21) 日本と韓国の比較については、異類婚姻譚を題材に論じたことがある(川森一九九〇参照)。
- また、隣接地域との比較の観点からは、中国の伝承との比較にも目を向ける必要がある。本稿では論じる準備がないが、直江広治(一九六七)、伊藤清司(一九六八)などにより、日本の「花咲爺」に対応する話型の紹介・考察がおこなわれている。そして、伊藤は、花咲爺型説話が中国ではもっぱら兄弟間の話となり、日本では隣人の話となることを示し、花咲爺に限らず、日中の昔話にはそういう傾向があるのではないかと指摘している(伊藤一九六八、六五九頁)。中国には「兄弟対立型」の

(22) この部分の記述は、中根(一九七三)によった。

参考文献

- 伊藤清司 一九六八 「昔話『花咲爺』の祖型―日本と南中国の昔話―」『日
本民族と南方文化』金関丈夫博士古希記念委員会編、平凡社。
- 稲田浩二、小澤俊夫編 一九七七―九〇 『日本昔話通観』全二九卷、同朋
舎出版。
- 稲田浩二 一九八四 「日本列島を通して―昔話の地域性 昔話―研究と資
料―第一三号」昔話研究懇話会編、三弥井書店。
- 稲田浩二 一九八八 a 『日本昔話通観第二八卷 昔話タイプ・インデック
ス』、同朋舎出版。
- 稲田浩二 一九八八 b 「日本国内での比較」『昔話の比較 昔話―研究と資
料―第一六号』昔話研究懇話会編、三弥井書店。
- 小澤俊夫 一九八四 「昔話にみられる隣モティーフ―日本」『口頭伝承の比
較研究1』川田順造、徳丸吉彦編、弘文堂。
- 川森博司 一九八九 a 「民間説話の構造―異類婚姻譚を中心に―」『民間説
話―日本の伝承世界―』福田晃編、世界思想社。
- 川森博司 一九八九 b 「日本異類婚姻譚の構造―交換構造を中心に―」(韓
国語)『比較民俗学』第五輯、韓国比較民俗學會。
- 川森博司 一九九〇 「日本と韓国の異類婚姻譚―その類型比較序説―」『日
本学報(大阪大学文学部日本学研究室)』第九号。
- 佐々木喜善 一九七四(一九二二) 「江刺郡昔話」『日本民俗誌大系第九卷東
北』、角川書店。
- 関 敬吾 一九七八『日本昔話大成』全二二卷、角川書店。
- 関 敬吾 一九七八 『日本昔話大成』第四卷。
- 関 敬吾 一九八一(一九五九) 「民話」『関敬吾著作集』第五卷、同朋舎
出版。
- 関 敬吾 一九八二(一九六六) 「昔話の歴史」『関敬吾著作集』第二卷。
- 直江広治 一九六七 「狗耕田譚(犬が島を耕す話)」『中国の民俗学』、岩崎
美術社。
- 中根千枝 一九七三 「沖縄・本土・中国・朝鮮の同族・門中の比較」『沖縄

- の民族学的研究』日本民族学会編、民族学振興会。
松浪久子 一九八四（一九八二）「昔話『大歳の亀』伝承と伝播」『日本昔話
研究集成第二巻 昔話の発生と伝播』福田晃編、名著出版。
三原幸久 一九七七「猿長者」『日本昔話事典』、弘文堂。
吉田禎吾 一九七〇『呪術―その現代に生きる機能―』、講談社。
崔仁鶴編著 一九七四『朝鮮昔話百選』、日本放送出版協会。
崔仁鶴 一九七六「韓国昔話のタイプインデックス」『韓国昔話の研究』、
弘文堂。

（本館 民俗研究部）

Typical Antagonism Revealed in Japanese Folktales

KAWAMORI Hiroshi

The two main topics of Japanese folktales are marriage and fortune-making. This thesis analyzes the latter type of folktales in an attempt to reveal the spirit of people who lived in a typical Japanese village community to hand down these pieces of folktales.

Significant among the type of fortune-making folktales are stories characterized by antagonism between I-the main character who makes a fortune and II-another character who fails to make a fortune. The antagonism is expressed in various combinations of conflicting parties such as a man and his wife, a man and his neighbor, or a man and his real brother or stepbrother, among which the preferred one in Japan is that of a man and his neighbor.

In the Amami and Okinawa islands, however, a type of antagonism between 'a man and his brother' appears in a high ratio depending on some kinds of stories. Detailed analysis of folktales in the Amami and Okinawa islands is expected to identify the difference from folktales in the main land of Japan so that the nature of antagonism between characters in Japanese folktales may be better understood.

The Japanese features may also be more clearly understood by comparing her folktales with that of other nations to reveal their similarities and differences. For example, in Korea, a type of antagonism between 'a man and his brother' appears more frequently in their folktales. More careful comparison, however, requires a classified collection of materials from various countries, based on which international comparison should be made.

The fact that a type of antagonism between 'a man and his neighbor' is the preferred type in Japanese folktales indicates that the relationship with neighbors was of main concern to people in a typical Japanese village community. Folktales provide valuable resources for investigating their inner world.